

境内を彩る 100 色の帯

境内における現代と過去を結ぶ建築の提案。
境内とは本来神の領域であり、また自然環境と一体になった多様な人間の営みの場でもある。しかし、特に都市部の寺社において、境内は歴史的に様々な要因からその範囲が縮小・変化を余儀なくされ、そのため少しずつ人間の場所がなくなってきた。一方で、現在の地図上からかつての境内を辿ると、その中には寺社に関する建物や参道、杜、小川などが周辺環境に混ざりながら今も残っているのがわかる。
私たちが提案する「境内を彩る帯」は、現代の境内と過去の境内を一本の帯で結ぶことで、人間の場所を再構築し、ワーケーションの拠点とする建築である。この帯は、周辺環境や用途に応じながら、高さや幅が変化し、作業スペースや腰掛けられるベンチ、少人数の打合せスペースなど様々な居場所となる。さらにこの帯を耐久性と強度を持ち、また 100 色以上も発色可能なチタンでつくる。その場所ごとに色をもち、形やスケールが変化する長い帯が、寺社や自然環境、また人々の姿と共に永く都市のなかに残っていくことを提案する。

桜並木に沿った桃色ベンチ
森の木々と補色の赤い屋根

公園の紫陽花に沿った紫の東屋

芝生に緩やかにかかる緑の小屋

手水舎の手前にかかる
水色の屋根

鳥居と同系色の
赤いベンチ

瓦屋根の関連寺院を
つなぐ黒色屋根の東屋

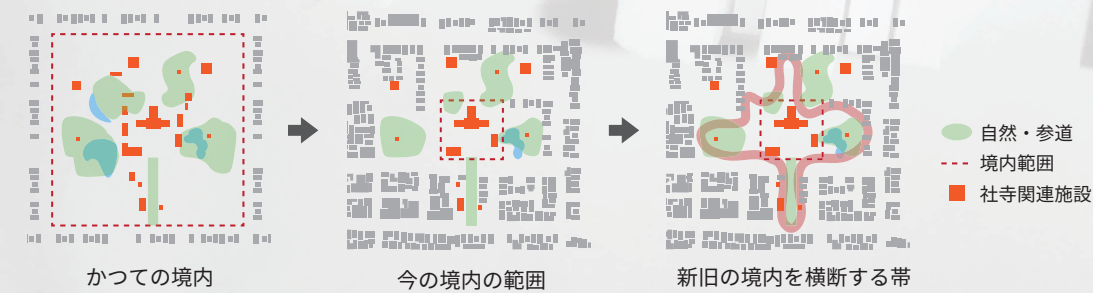
本堂の銅葺屋根の緑青と
緑屋根の東屋

川の遺構に沿う
水色のテーブル、ベンチ

銀杏並木に沿う黄色い屋根

陽極酸化により、
様々な色に変化するチタン

現代と過去の境内をつなぐ帯



周辺環境に応じて高さや色を変えるチタンの帯

